

大学生の子育てに対する意識

野波 典子*・猪野 郁子**

Noriko NONAMI and Ikuko INO

A Study on the Student's Senses of Child Care

[キーワード：個人志向性・社会志向性・しつけ・次世代育成力]

はじめに

近年、少子化が深刻な問題となっており、出生率を上げるためのさまざまな対策が打ち出されている。例えば、厚生省（現厚生労働省）は、人口問題審議会報告や厚生白書で、男女の役割分業意識と雇用慣習の是正、育児と仕事の両立への子育て支援策、あるいは、子育てに「夢」が持てるような環境整備等を提案している^(1,2)。つまり、人々が子どもを産み育てることに楽しみや喜びを感じる事が困難になっている現在の社会のあり方を問うているといえる。

中央教育審議会は「少子化と教育について」の報告のなかで、“社会全体で子どもを育てていく”という考え方を特に強調し⁽³⁾、現在は、大人社会のモラルの低下と次世代を育てる心が失われるという危機に直面しているから、子どもをもつ人ももたない人も、男性も女性も、家庭も企業も、社会全体が“次世代育成力⁽⁴⁾”を伸ばし、発揮することが望まれるとしている。

日本・中国・アメリカ3カ国の高校生を対象とした規範意識の比較調査によると、日本の高校生の規範意識は3国中最も低く、「自分さえよければ」という個人意識が強いことが注目される⁽⁵⁾。次世代を産み育てる世代が、“次世代を育てる心”に何より必要な「他者への関心や希望」をもっていないことは、現在の少子化をさらに押し進め、加えて育児不安を訴える母親や父親をさらには児童虐待を増加させるであろう事は想像に難くない。

子どもを産み育てることに楽しみや喜びを感じることが出来る環境を整えていくことが課題とされるが、子ども時代から自分より幼い者と関わる能力を養い、自分の子どもはもとより、社会の子どもの育ちに責任をもてる

人間に育てるべきではなかろうか。また、次世代を育成する能力としてどういうものが考えられるのかも明らかにしていく必要がある。

現在、中学・高校の家庭科で全ての生徒に保育体験をさせたいとする試みもなされている。しかし、週休2日制と「総合」という教科の導入も絡んで、家庭科に与えられる時間は少なく、体験実習の時間を確保することが難しいという局面を迎えている。しかし、こうした中でも、保育体験実習の効果が大きいことから多くの教師が時間のやりくりをしてでも確保しようとする傾向も出てきている。このことは、保育学習の内容の是非にも関わっている⁽⁶⁾。

以上のことを明らかにしていくその前段階として、ここでは、中学生や高校生よりも「次世代を産み育てる」ことにより近い場所にいる青年（大学生）らは、どういう生き方をしようとしているのか。そのことと育児のイメージはどう関わっているのかを明らかにしていく。

方法

現在の青年自身の生き方及び次世代を育てることに對する価値観を探るため、大学生181名を対象に、平成12年6月中旬質問紙調査を行った。配布数181部に対し、回収数は173部、有効回収率は95.6%であった。

主な質問項目は自身の志向性に関するもの17項目、しつけイメージに関するもの10項目、子育てに対する価値観に関するもの11項目、規範意識を見る31項目、次世代に身につけて欲しい行動に関する31項目から構成されている。ここでは、志向性としつけイメージとの関わりについて述べる。

青年の志向性調査については、伊藤⁽⁷⁾の「個人志向

*開成高等学校常勤講師

**島根大学教育学部家政教育研究室

性・社会志向性尺度」を参考に作成した。しつけに対する意識調査については、形容詞10項目を用いた。また、なるべく本音を探るために、「しつけ」の定義はあえて提示せず青年のイメージするものにまかせた。

伊藤の「個人志向性・社会志向性尺度」は17項目から構成されており、各項目に対して5段階評価が求められている。これらを「とてもあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらでもない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点として得点化した。反転項目「小さなことも自分ひとりでは決められない」「自分の生きる道が見つからない」では、「とてもあてはまる」を1点、「全くあてはまらない」を5点というように、他の項目と逆の得点を与えて点数化した。したがって、得点が高いほど「志向性」が高いことになる。

結果

(1) 個人志向性と社会志向性

個人志向性と社会志向性をみる17項目の各平均得点は表1の通りである。(個)は「個人志向性」項目であることを示し、(社)は「社会志向性項目」であることを示している。17項目中やや否定的な傾向がみられる項目は、「自分が満足していれば人が何と言おうと気にならない(個)(2.76 ± 1.14)」及び「自分が本当に何をやりたのかわかっていない(個)(2.90 ± 1.33)」の2項目であり、どちらも「個人志向性項目」である。その他は、すべて3点以上の平均点であり、11項目は平均が3.5以上と肯定傾向にあることが認められる。なかでも、特に肯定的な項目は、「人に対しては、誠実であるよう心掛

けている(社)(4.02 ± 0.88)」及び「人とのつながりを大切にしている(社)(4.05 ± 0.90)」であり、どちらも「社会志向性項目」である。

他者との関わりに対して冷淡なのではないかといわれている現代青年が、意外にも他者や社会との関わりを大切にする姿勢を見せていることが注目される。伊藤の調査結果⁽⁶⁾と比較すると、個人志向性・社会志向性とも得点が低いことが注目される(図1参照)ことから、本対象者たちの自信のなさや他者の中で自分をどう出していくかということに迷いがあるように見受けられる。このことは言い換えれば「たてまえ」が強く出されているともとれよう。

次に、「個人志向性項目」を構成する8項目、「社会志向性項目」を構成する9項目の平均点を算出し、それぞれを「個人志向性得点」、「社会志向性得点」とした。「個人志向性得点」、「社会志向性得点」の性別による各平均点及び標準偏差を表2に示す。

性別により得点の平均に差異がみられるか否かをt検定により比較したところ、「個人志向性」において、男性が女性よりも有意に得点が高いことが認められる。

「個人志向性」の具体的にどの項目において、性別により得点差がみられるのかを確認したところ、図2に示すように、「自分の信念に基づいて生きている」においてのみ男性の平均点が 3.95 ± 1.01 に対し、女性は 3.61 ± 0.88 と、5%の有意水準で差異が認められた。その他の項目においてもすべて男子の得点が高いが有意差は認められない。

表1に示したように、個人志向性の6項目では、標準偏差が1以上であることから個人差が大きいことを示し

表1 「志向性」項目に対する回答

	項 目	平均 値
個人志向性	自分が満足していれば人が何と言おうと気にならない。	2.76 ± 1.14
	自分が本当に何をやりたのかわかっていない。	2.90 ± 1.33
	自分の生きる道を見つけている。	3.14 ± 1.29
	周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる。	3.19 ± 1.03
	小さなことも自分ひとりで決められる。	3.37 ± 1.01
	自分の心に正直に生きている。	3.59 ± 1.02
	自分の個性を生かそうと努めている。	$3.69 \pm .99$
社会志向性	自分の信念に基づいて生きている。	$3.75 \pm .95$
	社会(周りの人)の中で自分が果たすべき役割がある。	$3.00 \pm .91$
	他人に恥ずかしくないように生きている。	$3.51 \pm .93$
	他の人の気持ちになることができる。	$3.53 \pm .85$
	周りとの調和を重んじる。	$3.69 \pm .99$
	他の人から尊敬される人間になりたい。	3.79 ± 1.00
	社会のルールに従って生きていると思う。	$3.83 \pm .89$
	社会(周りの人)のために役立つ人間になりたい。	$3.87 \pm .99$
	人に対しては、誠実であるよう心掛けている。	$4.02 \pm .88$
	人とのつながりを大切にしている。	$4.05 \pm .90$

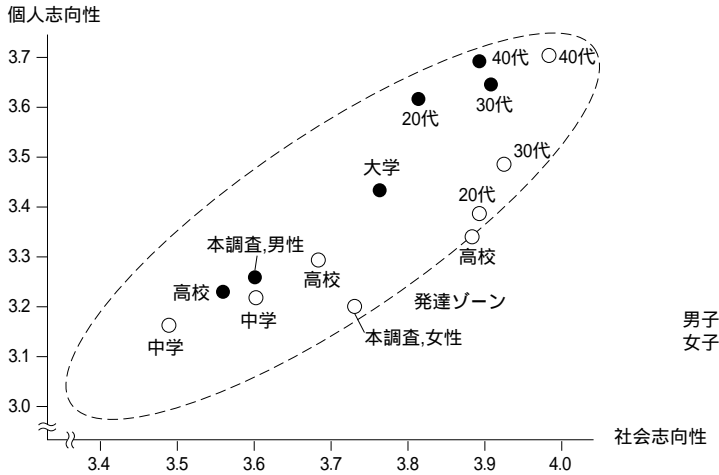


図1 二次元上に表された発達ゾーンと本調査の結果 伊藤1995文献8を元に作成

で男女間に有意な差異が見られる。男女とも肯定的な得点を示している「優しい」においては男性が、「必要な」においては女性が、それぞれより肯定的に捉えている。また、「楽しい」においては、男女ともやや否定的な得点であるが、女性の方が男性よりもより否定的に考えている。つまり女性は、男性よりもしつけを「必要な」行為であると強く認め、しつけに対する責任感も強くもっていると考えられる。それは、従来の性別役割分業観に無意識に拘束されているために、しつけの担当者意識が強く出ているものと考えられる。そして、しつけをより現実的に捉えていることから、あまり「楽しい」ものではないとしているのであろう。

表2 性別にみる「志向性得点」

	男性	女性	全体
「個人志向性」	3.26 ± .44	3.10 ± .44	3.16 ± .45
「社会志向性」	3.60 ± .64	3.74 ± .43	3.69 ± .52

* p<0.05

ている。対象者の大学生は、いわゆる「モラトリアム期」にあり、自分の生き方を見つけ出そうとする時期であることも関係しているのではなかろうか。

(2) しつけ観

次に、対象者のしつけ観を概観する。全体の平均得点及び性別の平均得点は、表3の通りである。しつけ観は、「しつけに対するイメージを表す10の語句」について5段階SD法により得た結果を、「とてもそう思う」を5点から「全くそうは思わない」を1点までの5点法で採点した。得点の高い者ほどしつけに対して肯定的なイメージをもっていると考えられる。

最も低いイメージは「楽しい」であり、全体の平均点は2.70 ± 0.92とやや否定的な傾向がみられる。その他の9項目では、どれも肯定的な(3点以上)傾向を示している。なかでも「役に立つ」「必要な」の2項目においては、強く肯定されている。全体的にみると、しつけを「役に立つ」「必要な」行為であると強く認めながらもそれはあまり「楽しい」ものではないと捉えているとみえよう。

性別にみると、「優しい」「必要な」「楽しい」の3項目

「楽しい」ものではないとしているのであろう。

私たちは、子どもに何らかの問題が起きると、その原因を家族、特に子どもの育て方に求める傾向がある。また、母親が子どもを車に置き去りにしたままパチンコをしたりすると「母親のくせに子どもを放って遊ぶとはけしからん」「母親ならば子どもを第一に考えるべきだ」などと、非難されるのが通常である。親は(特に母親は)、子どもとの関わりを第一にしなければならないというイデオロギーが強い社会では、子どもをもち、しつけることに、「楽しい」という気持ちがもてないのも仕方ないことであらう。

表3 しつけ得点

	全体	男性	女性
温かい	3.63 ± .95	3.66 ± .96	3.60 ± .94
優しい	3.18 ± .90	3.36 ± .94	3.08 ± .86
明るい	3.17 ± .79	3.27 ± .84	3.09 ± .74
楽しい	2.70 ± .92	2.90 ± 1.05	2.59 ± .82
自然な	3.38 ± 1.29	3.50 ± 1.32	3.28 ± 1.27
健康的な	3.70 ± .85	3.71 ± .92	3.67 ± .81
希望のもてる	3.78 ± .78	3.71 ± .84	3.81 ± .73
役にたつ	4.45 ± .71	4.35 ± .83	4.51 ± .63
魅力のある	3.16 ± .85	3.11 ± .99	3.17 ± .74
必要な	4.65 ± .63	4.52 ± .79	4.72 ± .51

* p<0.05 ** p<0.001

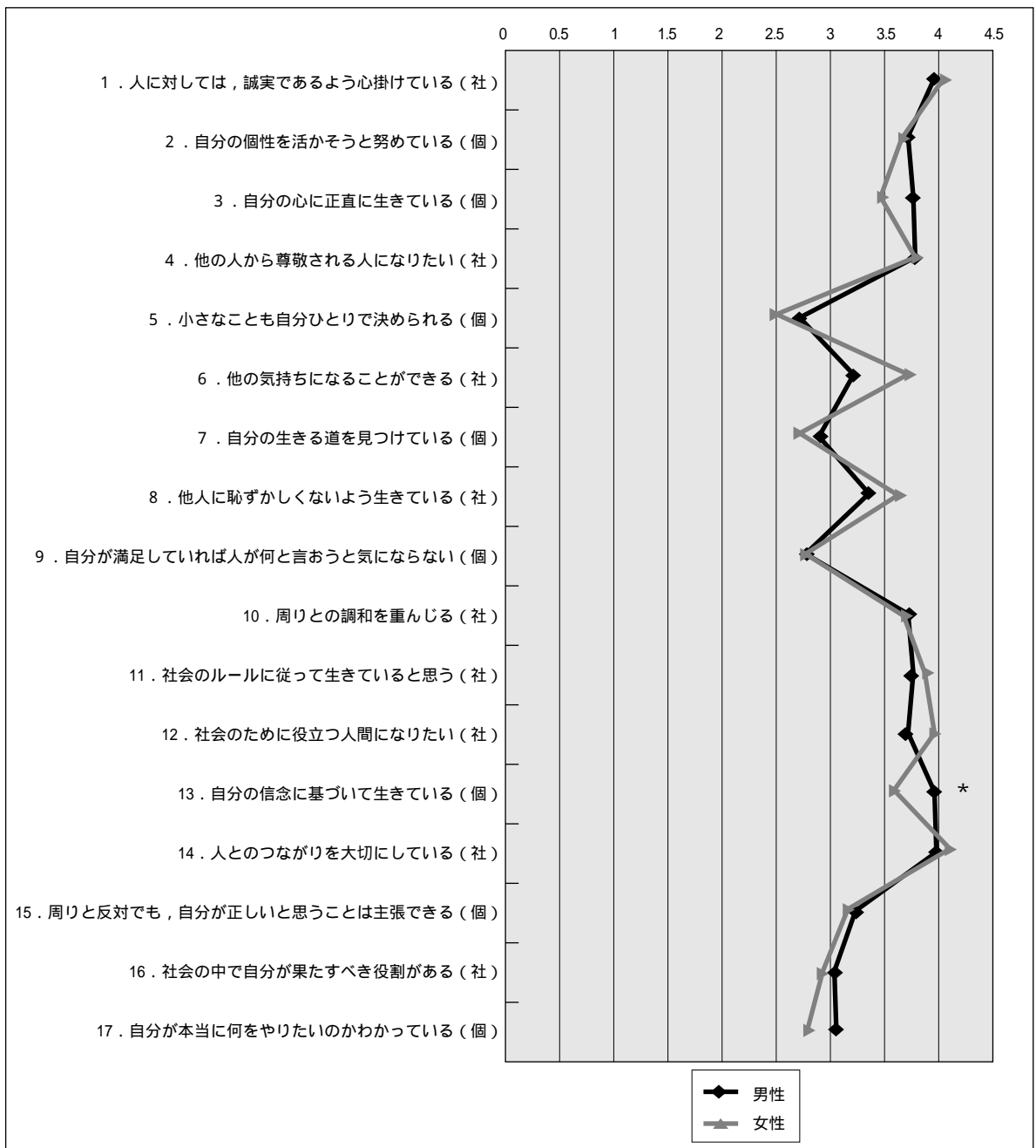


図2 性別による志向得点

* P<0.05

(3) 志向性としつけとの関連

まず、「しつけ」に対するイメージを問う10項目の合計点と「個人志向性得点」、「社会志向性得点」との相関について、Pearsonの相関係数を用いて検定を行なった。その結果、相関係数はどちらとも1%水準で有意であっ

た。

そこで、「個人志向性」「社会志向性」の各平均点を基準として、平均点以下を「低群」、平均より大きい者を「高群」という2群に分け、両群間にしつけ観の差異がみられるか否かを検定した。

個人志向性についての結果は表4の通りである。いずれのイメージ語においても、個人志向性の高い群の方が肯定しているのが、有意に差異が見られたのは「明るい」と「楽しい」の2項目である。いずれも、高群の方が低群より得点が高く、しつけを「明るく」「楽しい」ものと肯定的している。

同様に「社会志向性」についてみたものが表5である。ここでも高群の方に得点が高い(肯定的)のであるが、両群間に有意な差異が見られたのは、「希望のもてる」「役にたつ」「魅力のある」の3語においてであった。つまり、高群の方がより肯定しているといえる。

このように、「志向性」のあり方としつけ観の関係を

表4 「個人志向性」としつけ観

	「個人志向性低群」	「個人志向性高群」
温かい	3.53 ± .92	3.76 ± .97
優しい	3.06 ± .84	3.33 ± .96
明るい	3.03 ± .67	3.34 ± .89
楽しい	2.57 ± .86	2.86 ± .98
自然な	3.21 ± 1.26	3.58 ± 1.32
健康的な	3.61 ± .85	3.80 ± .84
希望のもてる	3.71 ± .75	3.86 ± .80
役にたつ	4.45 ± .68	4.46 ± .76
魅力のある	3.11 ± .84	3.21 ± .86
必要な	4.62 ± .62	4.68 ± .65

* p<0.05

みると、「個人志向性」、「社会志向性」どちらにおいても、得点の高い群の方が低い群に比べて、しつけに対するイメージが肯定的であると言える。

「個人志向性」において、得点の低い群と高い群とに差異がみられた項目は、「明るい」、「楽しい」のように、しつけを行う主体が感じるであろう主観的な気持ちに関するものである。すなわち、自身の本音の部分である。「個人志向性」は、伊藤⁽⁹⁾によると“自由奔放でいい子ぶらない”という性格特性と関連しているという。本調査においても「個人志向性得点」の高い者と低い者では、しつけに対する本音のイメージの部分に差がみられる。

このことは、青年の本音は「しつけは(子どもを育てることは)楽しいとは思えない」というものであると見てよいのではなかろうか。

「社会志向性」において、得点の低い群と高い群とに

表5 「社会志向性」としつけ観

	「社会志向性低群」	「社会志向性高群」
温かい	3.55 ± .90	3.62 ± .99
優しい	3.16 ± .84	3.20 ± .98
明るい	3.10 ± .70	3.25 ± .87
楽しい	2.62 ± .82	2.80 ± 1.02
自然な	3.28 ± 1.30	3.48 ± 1.28
健康的な	3.61 ± .89	3.79 ± .81
希望のもてる	3.58 ± .75	3.98 ± .76
役にたつ	4.31 ± .79	4.60 ± .60
魅力のある	2.96 ± .82	3.37 ± .83
必要な	4.56 ± .70	4.74 ± .54

** p<0.01

差異がみられた項目は、「希望のもてる」「役にたつ」「魅力のある」のように、しつけを行うことで得られる効果に関するものである。これは、理性的に認知されるものである。伊藤によると、「社会志向性」は“社会規範的で配慮性があるが、自由さに欠ける”という性格特性と関連をもっているという。そうであるならば、本調査で「社会志向性」の高い者は、低い者よりしつけに対して理性的なイメージをもっているのであるが、“親になったら子育てを最優先するもの”という社会規範のようなものに準じようとしている。でもやはり「楽しい」とは思えないということになる。

したがって、「個人志向性」が低く「社会志向性」が高い者は、子どもを育てることに対するストレスをもちやすいのではないかと考えられる。社会志向性は、社会への適応を測るものであるとされるが、社会性が強い者ほどしつけを困難なものとする傾向があるともいえ、子育てをしにくい・子育てに希望をもてない社会が背景にあることが改めて示唆されるのではなかろうか。

．おわりに

先に述べたように、次世代を育てることに希望をもつことができるような環境づくりが社会的要請となっているが、その実現には人々の子どもを育てることに対する関心や責任感のあり方が関わってくると考える。本章では、個人・社会志向性、規範意識のあり様とそれに規定されるしつけ観及び次世代への関心のあり様を分析することを通して、青年の次世代育成力を規定する心理的要因を探ろうとした。

173名の大学生を対象として、個人・社会志向性としつけ観との関わりを見たところ、次のような結果が得られた。

- 1) 個人志向性より社会志向性が肯定されていた。
- 2) 個人志向性の8項目の中で「自分が満足していれば人が何をいおうと気にならない」と「自分が本当に何をやりたいのかわかっている」の2項目は、やや否定傾向であった。
- 3) 特に個人志向性において、女性の方に得点が高いこと、女性に迷いが大きいと見れる。
- 4) しつけのイメージ10語について、「楽しい」以外は肯定されている。
- 5) 「優しい」「必要な」「楽しい」の3語で男女差が見られる。男性は、女性よりもしつけを「優しい」「楽しい」と捉え、女性は男性より「必要な」と捉えている。
- 6) 個人志向性と社会志向性は、ともに高群が低群よりしつけイメージを肯定しており、中でも、個人志向性では、「明るい」「楽しい」で、社会志向性では、「希望の持てる」「役に立つ」「魅力のある」において、有意に高群が肯定している。

以上である。

しつけ観のなかでも、「楽しい」「明るい」などの主観的な意識を規定するものは、個人志向性の高低であった。この志向性は、中学生ごろから高まると言われているが、そうであるならばその時期に子どもを育てることに対して、「楽しい」と思えるような機会を与え、子どもを産み育てることを選択する際の土壌を育むことが望まれると考える。具体的には、幼い子どもとの触れ合い体験などを通して情意面を育てることが効果的であろう。また、しつけを“希望のもてる”とする意識には、社会志向性の高低が関わっていた。こうしてみると、思春期から青年期にかけて、自己の確立と他者との関係づくりがスムーズに行われるようにしていくことも必要になる。

今回考察から省いたが、同時に実施した規範意識との関連並びに次世代に望む彼らの姿勢は、世間一般にいわれているような、自己中心で「育ってくる次世代のことなど知らない」という無関心でもないことが判明している。彼らが、次世代育成に強い責任感を持ち、それに縛られることによって反って子育てに消極的になっているとするなら、またそれは問題になる。

ともあれ、子育ては社会全体で責任をもつべきなのだという土壌を育くむためには、社会志向性や規範意識に迫るようなアプローチが効果的であることが示唆された。

なお、本報告の1部は、日本家政学会第53回大会において口頭発表を行った。

- (1) 厚生省人口問題審議会「少子化に関する基本的な考え方について」1997
- (2) 厚生白書「少子化を考える一子どもを産み育てることに『夢』をもてる社会を」厚生省監修、ぎょうせい、1998
- (3) 中央教育審議会答申「幼児期からの心の教育の在り方について」文部時報臨時増刊号、ぎょうせい、24、1998
- (4) 原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力 - 産み育てる社会のために - 』、新曜社、305-327、1993
- (5) ポケベル等通信媒体調査 日米中の比較を通して - 日本青年研究所、平成8年
- (6) 佐藤園、家庭科における家族・保育領域のあり方(第2報) - 現代アメリカ家庭科プロジェクトにみる“家族と子どもの発達”の目的と内容構成、岡山大学教育学部集録第108号、1998
- (7) 伊藤美奈子、「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」、心理学研究第64巻第2号、115 - 122、1993
- (8) 伊藤美奈子、「個人志向性と社会志向性と意欲」現代のエスプリ、『意欲 やる気と生きがい』、176-187、至文堂、1995
- (9) 前掲書(8)